2018.12.30　聖家族

少年イエス迷子になる

ルカによる福音　2:41-52

（イエスの）両親は過越祭には毎年エルサレムへ旅をした。イエスが十二歳になったときも、両親は祭りの慣習に従って都に上った。祭りの期間が終わって帰路についたとき、少年イエスはエルサレムに残っておられたが、両親はそれに気づかなかった。イエスが道連れの中にいるものと思い、一日分の道のりを行ってしまい、それから、親類や知人の間を捜し回ったが、見つからなかったので、捜しながらエルサレムに引き返した。三日の後、イエスが神殿の境内で学者たちの真ん中に座り、話を聞いたり質問したりしておられるのを見つけた。聞いている人は皆、イエスの賢い受け答えに驚いていた。両親はイエスを見て驚き、母が言った。「なぜこんなことをしてくれたのです。御覧なさい。お父さんもわたしも心配して捜していたのです。」すると、イエスは言われた。「どうしてわたしを捜したのですか。わたしが自分の父の家にいるのは当たり前だということを、知らなかったのですか。」しかし、両親にはイエスの言葉の意味が分からなかった。それから、イエスは一緒に下って行き、ナザレに帰り、両親に仕えてお暮らしになった。母はこれらのことをすべて心に納めていた。イエスは知恵が増し、背丈も伸び、神と人とに愛された。

説教

イエスの家族は伝統的に「聖家族」として、わたしたちの模範とされてきました。でも、父親ヨセフの影がうすい家族です。

> **「どうしてわたしを捜したのですか。わたしが自分の父の家にいるのは当たり前だということを、知らなかったのですか。」**ルカ２：49

少年イエスは父親ヨセフの目の前でこのように言っています。これではヨセフの面目丸つぶれです。また、イエスは母子家庭で育っているような書き方

も福音書ではされています。兄弟がいたのかいないのかもはっきりしていません。きょうの朗読個所でもイエスの弟、妹たちは過越祭に同行してないようです。兄弟たちはナザレの親戚の家で留守番していたのでしょうか。福音には母と子、マリアとイエスの関係は詳しく書いてありますが、イエスの家族関係となるとわからないことが多く、けっこう欠けのある家族のようにも見えます。でも、現代の日本の家族にも通じるところがあり、ぎゃくに親近感を感じます。

さて、イエスが処刑されたのは金曜日でした。そして三日後の日曜日の朝に復活します。12 歳のイエスのエルサレム詣も終わり、家路についたヨセフ一家は、一日たってイエスがいないことに気づきます。

> **親類や知人の間を捜し回ったが、見つからなかったので、捜しながらエルサレムに引き返した。**ルカ 2：45

こどもが迷子になったら親は必死にさがしますよね。そして見つかったら安心し喜びますが、なぜか小言もいいます。

> **母が言った。「なぜこんなことをしてくれたのです。御覧なさい。お父さんもわたしも心配して捜していたのです。」**ルカ 2：48

迷子になったイエスを三日後に神殿で見つけた時、母マリアは怒りました。「なぜこんなことをしてくれたのです」イエスが生意気な受け答えをしたあと、母の心情をルカはこう書き残します。

> **それから、イエスは一緒に下って行き、ナザレに帰り、両親に仕えてお暮らしになった。母はこれらのことをすべて心に納めていた。イエスは知恵が増し、背丈も伸び、神と人とに愛された。**ルカ 2：51-52

神殿で少年イエス迷子になる、というきょうの福音はイエスの死と復活を暗示している、という解釈もあります。

イエスが迷子になり三日目にみつかることがイエスの遺体が墓から消えたこと、そして三日後に復活するということを予表、暗示しているという解釈です。福音をマリアのように心に納めて思いめぐらすと、ひとりひとりの心の

中にそれぞれのともし火が灯るのではないでしょうか。たとえいま失ったとおもっていても、また、うまくいかなく行き詰った現実があっても、わたしたちの思いもおよばないことが備えられていることを信じましょう。新年が神に愛された、よき訪れの時となりますように。